



Title	中国人日本語学習者によるアカデミック・ライティング上の引用に関する探索的研究—引用の理解と産出をめぐって—
Author(s)	劉, 東
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(劉東)	
論文題名	中国人日本語学習者によるアカデミック・ライティング上の引用に関する探索的研究 —引用の理解と産出をめぐって—
論文内容の要旨	
<p>本研究の目的は、中国の4年制本科大学（以下、大学と略す）でのライティング教育における、学術的文章の引用に関するより効果的な指導に向けた提言を行うため、学部レベルの中国人日本語学習者が有する引用についての知識や意識を、理解と産出の両面から明らかにすることである。具体的には、上級日本語能力を有する日本語専攻生（以下CLJ）が学術的文章の読解を行う際、その文章の書き手自身の記述と他者からの引用を区別する際に有する問題点や困難点を把握した。また、CLJの学術レポートに現れる引用の使用実態・問題点、および使用上の意識を検討した。</p> <p>第1章では、本研究の背景を示した。中国の大学では日本語専攻の教育改革が進んでおり、それに伴いアカデミック・ライティング（以下AW）能力の育成がより一層重視されるようになっている現状を示した。また、CLJによる学術的文章にはさまざまな問題が存在しており、特に引用の不適切な使用が頻繁に見られることを指摘し、それはCLJの学術的文章を「読む」「書く」能力の不足に起因することを述べた。</p> <p>第2章では、先行研究を概観した上で、本研究の位置づけを示した。まず、本研究が深く関係する中国の大学における日本語教育の現状を述べ、「精読」授業とAW授業に関する先行研究と教育実践の報告を概観した。卒業論文など学術的文章の重要性が高まる一方、CLJ向けの日本語教育ではAW能力の向上に資する教育実践が十分に行われていないことを確認した。次に、本研究が属する分野であり、かつ分析の枠組みとなる専門日本語教育の定義と特徴をまとめ、専門日本語教育研究の下位分類の1つである専門日本語ライティング研究を概観した。その上で、本研究の分析対象である、AWにおける引用に関する諸研究について詳述した。先行研究の知見に基づき、専門日本語教育の観点から、1) 学術論文における引用文の読解の実態を把握する必要性、2) 実際の引用使用の諸相および使用時の意識を調査・分析する必要性について論じた。</p> <p>第3章では、第2章で述べた研究課題のもとで遂行する研究全般に関して、2種の調査における協力者の属性および方法を説明した。引用に対する「理解」を明らかにする調査1では、CLJ16名（大学3、4年次の在学生12名・卒業生4名）に対して引用箇所判断調査を行い、16名のうち14名にインタビュー調査を行った。引用の「産出」の実態と使用意識を明らかにする調査2では、CLJ20名（大学3、4年次の在学生15名・卒業生5名）に意見型レポートの作成を依頼し、その後20名全員にインタビューを行った。</p> <p>第4章では、CLJの学術論文における著者の記述と他者からの引用との区別の判断、および両者区別の際に直面した困難点を明らかにした。その結果、CLJは論文中の引用の存在自体は、形式面への着目によりほとんど判断できている一方で、引用箇所判断の正答率が比較的低いことから、必ずしも引用と筆者の考えを正確に見分けられるとは限らないことがわかった。また、CLJは「著者・出版年」もしくは「脚注や括弧」といった明らかな出典表示から引用箇所を特定していることが判明した。さらに、認知率が低い箇所と、正答率が低い箇所の特徴を中心に、インタビューデータを用いて分析・分類した結果、「直接・間接引用が混在する引用文」、「複数文における引用文」、「文献紹介の引用文」、「引用と筆者の考えが一文の中に書かれている引用文」の判断に困難が存在することを明らかにした。同時に、論文の読解過程において著者自身の意見と第三者からの情報（事実）を区別せず読んでいく様子もうかがえた。これらの調査結果に基づき、事実と意見を明確に厳密に区別することの重要性や、その区別の方法といった引用への理解を促すことが必要であることを述べた。</p> <p>第5章では、CLJによる意見型レポートにおける引用の使用実態を「引用元」「引用の形式」「引用の表示方法」「引用動詞のテンス・アスペクト」「引用の位置」という5つの側面から明らかにした。また、そこに見られる引用の問題点を質的に分析・考察した結果、「直接引用した内容の改変」「引用と自説の区分の不明瞭さ」「引</p>	

用元への依存」「解釈のない引用」の4つに分類した。引用の使用実態の分析を踏まえ、CLJには引用に際し、①引用元の学術性と信頼性を見極める意識を持たせる、②孫引きを避けるよう、引用の表示方法への正しい認識を定着させる、③引用動詞のテンス・アスペクトの使用傾向を明示的に指導し、特にタ形とテイル形の使い分けを認識させる、ことの重要性という教育的示唆を得た。また、CLJへの引用の指導や学習支援では、上記の引用の問題点が含まれている引用文例を示し、その問題点への注意を促すことが必要であると述べた。

第6章では、CLJによる意見型レポートや引用に関する内省をもとに、引用に対する認識とその認識がレポートに与える影響について調査結果を詳述し、考察を行った。その結果、①多くのCLJは引用の学習経験を有しているが、その学習は引用文の定型や参考文献リストの作成といった形式面の学習にとどまっていた。②引用の使用理由が複数の側面から語られていたが、使用理由に対する不適切な認識により、書き手自身の文章との関連性が明確ではない引用文が産出されていた。③引用元に対して「常識」もしくは「既有知識」との認識があったことから、先行研究を借用したものの、出典が明示されない事例があった。④引用使用の困難点が多数存在しており、特に、間接引用時のパラフレーズが困難であるとの認識があったことから、原典の表現の抽出にとどまる引用文が作成されていた。これらの結果から、「アイディアの盗用」や「表現の盗用」を避けるため、AW教育を行う際には、CLJに引用に対する正確な認識を持たせ、引用のルールを最優先事項として指導する重要性を示した。また、間接引用の指導に際し、表層的に表現を置き換えるのではなく、パラフレーズを包括的に捉える重要性にまで意識の深化を促す必要があることを指摘した。

終章の第7章では、以上の2種類の調査から得られた結果をもとに、今後の中国の大学における日本語専攻教育における引用指導のあり方について提言を行い、引用に関する書記言語教育の意義について論じた。引用学習の初期段階、すなわち理解段階において、学生には引用に関するスキーマを形成させるため、教師による引用に関する専門的な知識の提供が重要である。具体的な指導内容としては、事実と意見の区別や、異なる分野の学術論文における引用文の多様性や使用目的への正確な理解を促すことが考えられる。次の段階である引用の産出段階では、CLJが作成した引用文の明らかな問題点に関しては明示的フィードバックが有効であるが、引用の意識面の指導においては教師が常に問題を指摘するのではなく、学生同士の協働学習の活用により、引用の使用意図や、外の情報を借用しながらも出典を明記しなかった理由の言語化に基づいたCLJの引用使用に関する意識の共有ができるれば、他者からの支援を契機に引用に関するスキーマの深化が進む可能性が考えられる。ただし、学生が引用に関する理解の学習を終えた後においても、引用の産出段階において誤りなく引用を使用できるとは限らない。学生の引用文に問題が生じた場合、引用の理解段階に戻り、その引用文に関する問題点についての知識をさらに深めるような指導が求められる。情報過多とも言える現在、AIの目まぐるしい発展に伴い、研究者にとっても、情報の適切な峻別と解釈および、研究に対する正確で適切な取り込みは、過去に例を見ないほど、負荷のかかりやすい重要な作業に位置付けられるものと言える。AWにおける引用は受信と発信の両方に密接に関わるものであり、その能力は大学での学習・研究活動で有用であるだけでなく、著作権問題の回避や、他者と対話して異なる視点を認識する能力の向上といった、大学院修了後の社会での種々の実務にも繋がる重要度の高いものと言える。

最後に本研究の意義と今後の課題について述べた。本研究の意義は、第一に、研究観点の新規性である。日本語教育学分野においてこれまで引用文理解に必須の「読解」を対象とした研究や、引用の使用意識を明らかにした研究が少数にとどまる中、本研究ではCLJを対象に、論文における引用箇所を判断した際の問題や困難を詳細に分析・考察し、かつ、引用の使用意識を綿密に追究したという点で意義があると考えられる。第二に、研究方法論の応用性である。本研究では、CLJの声に耳を傾け、インタビューを通じて多数の貴重なデータを収集し、CLJが引用の読解および執筆において直面する問題点や困難点を把握した。今後も、本研究のようなインタビュー調査を通じてCLJの意識を具体的に考察すれば、AWの教育方法を開発・改善する際に有用な示唆が得られるであろう。第三に、教育提案の実行可能性である。本研究では、CLJの引用の理解と産出に関する2種類の調査を行った結果から、まず各分野の学術論文における引用文の読解経験を蓄積し、試行錯誤を経ながらも徐々に引用文を作成するに至るという引用の漸進的な教育提案を議論し、具体的な教育実践への示唆を得た点で一定の成果を上げたと言える。今後の課題は、大学学部生の場合は、学部の初年次学生か高学年学生か、卒業論文執筆の経験者か否か、あるいは大学院生か等、研究経験の有無や在学段階の違いによる引用への認識の差異を解明することである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

	氏名(劉東)
	(職)		氏名
論文審査担当者	主査	教授	村岡貴子
	副査	准教授	大谷晋也
	副査	教授	王周明

論文審査の結果の要旨

本論文は「中国人日本語学習者によるアカデミック・ライティング上の引用に関する探索的研究－引用の理解と産出をめぐって－」と題し、学習者が抱える具体的な引用の問題・課題とその意識の実態を、引用への理解・産出の両面から分析・考察を行い教育的示唆に向けて論じたもので、学習者の視点を重視した意欲的な論文である。

第1章では、本研究を取り巻く背景として、中国で現在進行する教育改革等について論じ、大学の日本語専攻でアカデミック・ライティング（以下AW）能力の向上が強く要請される社会的背景事情や関連研究の知見を丁寧に記述している。上記の専攻生（以下、CLJ）が抱えるAWの問題として学術的な文章における引用上の不適切な問題の存在を指摘し、それらが「読む」「書く」双方を含む書記言語能力の不足に起因するとの議論を展開している。この議論が、本研究の調査・分析から考察・結論に至るまで一貫して本研究の根幹をなしているものと言える。

第2章では、国内外の先行研究を丹念に読み解き、関連する研究の流れを示した上で、本研究の位置づけを行っている。そこでは、本研究のテーマに深く関連する中国の大学の日本語教育の現状と課題について鋭く追究し、学習者のAW能力の向上を目指すべき教育実践が必ずしも十分に効果を發揮し得ていない状況を、多数の先行研究を吟味しながら批判的に議論を行った。また、本研究の分析の枠組みとなる専門日本語教育研究について、多くの文献から定義を示し、かつ、本研究が依拠する専門日本語ライティング研究を概観している。さらには、AWにおける引用に関する先行研究について丁寧に概観し、それらの流れをふまえた上で、本研究で取り上げた、学術論文の読解、および、それに続いて引用を伴う文章作成、さらにはそれらの活動時の意識について、詳細な調査を行う必要性と意義を力説している。従来、関連の研究においては、学習者の引用に関する意識の実態や、引用を含めた文章作成の過程における個々の局面に鋭く切り込んだ研究があまり行われていなかった。昨今の研究倫理遵守に関する状況を見ても、引用をめぐる学習者への種々の問題・課題についての調査はその必要性が増す一方である。その意味からも、本研究は意義が認められ、時宜を得たものと言える。

第3章では、本研究で行った2種の調査について、協力者となるCLJの属性と方法が説明されている。まず、引用に対する「理解」状況を探る調査1では、16名のCLJに対し、引用箇所の判断を求める調査を行い、続いてそのうち14名にインタビュー調査を行った。次に、引用の「産出」の実態と使用意識を探る調査2では、20名の協力者CLJを得て、意見型レポートの作成を依頼し、20名全員に対してインタビュー調査を行ったことが報告されている。

第4章では、CLJによる学術論文の読解後に行われた、論文著者の記述と他者からの引用の記述との区別の判断に関する調査の結果と、それら両者の区別を行う際の困難点を明らかにしている。CLJは、論文中の引用の存在は、著者名や刊行年、脚注や括弧といった形式面から、明示的な記述を捉えることにより、正確な判断が可能であった一方、複数文にまたがる引用については、引用箇所の判断の正答率が比較的低いことが明らかとなった。その結果は、CLJが、1文を超えた引用部分の記述を読んだ場合、必ずしも引用部分と筆者の見解との峻別ができるていないことを意味する。こうした「複数文における引用文」に加えて、CLJは「直接・間接引用が混在する引用文」「文献紹介の引用文」「引用と筆者の考えが一文の中に書かれている引用文」の判断が困難であったことも判明した。さらに、論文の読解過程において、CLJは、著者の意見と第三者からの情報を区別せずに読み進めていた状況も捉えて記述されている。以上の結果に基づき、1文レベルの直接引用のような判断が容易なケースのみならず、学術論文に見られる複数文にまたがる多様な形式による引用についても指導が必要で、事実と意見の明確な峻別の重要性と、その区別の方法を取り上げた厳密な引用の運用を促す指導が重要であると結論づけている。こうした具体的な

問題点の分類は、先行研究やAWの関連教材においても十分には取り上げられておらず、漢字圏の学習者であっても学術的な文章に対する厳密な読解が難しい様相を、貴重なデータ分析から説得力を持って示されている。

第5章では、CLJが作成した意見型レポートに見られる引用の実態を、「引用元」「引用の形式」「引用の表示方法」「引用動詞のテンス・アスペクト」「引用の位置」の5側面から提示し、そこに見られる引用の問題点を質的に分析・考察した結果、「直接引用した内容の改変」「引用と自説の区分の不明瞭さ」「引用元への依存」「解釈のない引用」の4つに分類している。こうした引用使用に対する分析をふまえ、教育的示唆として、次の4点を挙げている。すなわち、1) 引用元の学術性と信頼性を見極める意識を持たせる、2) 孫引きを避けるよう、引用の表示方法への正しい認識を定着させる、3) 引用動詞のテンス・アスペクトの使用傾向を明示的に指導し、特にタ形とテイル形の使い分けを認識させる、という3点である。今後の教育・学習支援の方策として、こうした引用の問題点が含まれる文章例の活用と、その問題点への検討や注意喚起が重要であると示されている。これらの対応は一定期間を要するものの、教育現場で特に対処すべき内容が整理され、具体的に明らかにされた点が高く評価できる。

第6章では、CLJによる意見型レポートや引用に関する内省をもとに、引用に対する認識とその認識がレポートに与える影響について調査結果を詳述し、考察を行った。その結果、①多くのCLJは引用の学習経験を有しているが、その学習は引用文の定型や参考文献リストの作成といった形式面の学習にとどまっていた、②引用の使用理由が複数の側面から語られていたが、使用理由に対する不適切な認識により、書き手自身の文章との関連性が明確ではない引用文が産出されていた、③引用元に対して「常識」もしくは「既存知識」との認識があったことから、先行研究を借用したものの、出典が明示されない事例があった、④引用使用の困難点が多数存在しており、特に、間接引用時のパラフレーズが困難であるとの認識があったことから、原典の表現の抽出にとどまる引用文が作成されていた、との4点が示された。これらの結果から、「アイディアの盗用」や「表現の盗用」を避けるため、AW教育を行う際には、CLJに引用に対する正確な認識を持たせ、引用のルールを最優先事項として指導する重要性を強調している。また、間接引用の指導に際し、表現を単に置き換えるのみの表層的な作業が重要なのではなく、間接引用に必須のパラフレーズを包括的に捉える重要性にも言及し、CLJの意識の深化を促す必要性を指摘した。

最終章となる第7章では、以上の結果と考察をもとに、リサーチクエスチョンに答える形で総括を行い、中国の大学における日本語専攻教育における引用指導のあり方について提言を行っている。本章では、引用に関するスキーマ形成のため、引用に関する問題・課題をより俯瞰的に捉え、「読む」「書く」双方を含む書記言語教育について議論を行っている。引用の学習の初期段階として、引用に関する専門的な知識の提供が重要であるとし、上述した事実と意見の区別や、分野の違いにも留意した、学術論文における引用文の示し方の多様性や使用目的への正確な理解を促す重要性を述べている。さらに次の引用の産出段階としては、CLJの問題点に対し、教師が明示的なフィードバックを個々に行うことのみに依存するのではなく、学生同士の協働学習を活用することを提案している。引用の使用意図や、出典を明記しなかった無断転載の理由について、CLJの引用使用に関する考え方の共有や議論を深めることにより、引用に関するスキーマの深化が進む可能性が期待されるとしている。なお、必要に応じて、引用に関する理解と産出の両段階を行き来する指導の必要性についても言及されており、単純な技能別の教育ではなく、書記言語教育の広い捉え方を示唆したもので興味深い。また、こうした引用の学習は、学部だけでなく、大学院においても、ひいては卒業・修了後の社会で求められる実務にも繋がる重要なものと位置づけられている。以上をふまえ、この章の最後には、本研究の意義をまとめた上で、今後の課題としては、在学段階の高低や論文執筆経験の有無などによる、引用に対する認識の差異をより明らかにしていく必要性にも言及している。

以上の通り、全7章から成る本論文は、高く評価できる点が多々あるが、次に3点に集約して示す。

まず、研究の独創性について評価したい。従来、AW教育の引用に関する関係の研究や教育開発は多々見られ、種々の知見が提示されてきた。一般に、成果物である文章本体の分析が比較的多くなされてきた中で、本論文は、実際の学習者に対し複数の方法により、学習上の困難点や教育上の課題を探り、学習者の引用への理解や手続きに伴う種々の局面における問題を明らかにした。論文中に「学習者の声に耳を傾け」の必要性が明記されており、本論文ほど細やかに、データ分析から説得力を持って議論を行った研究は他に見られない。

また、本論文は副題にあるように探索的としつつ、研究の方法論は妥当であり、データ収集が困難な中、得られたデータを丁寧に扱い、学習者が抱える悩みや難しさを、学習者の視点から丁寧に捉えることに成功している。

最後に、論理的な展開と表現の明瞭さも指摘しておく。本論文全体を通じて貫通性はゆるぎなく、わかりやすい表現で記述されている。個々の学習者の問題も考察も、読者が納得、共感しやすい記述であると評価できる。

なお、日本語ではなく、学習者の母語で書かれた学術論文への理解の程度や、外国語ゆえの困難さに起因する問題についてはまだ研究の余地があるが、それらは今後の課題として研究の発展を期待したい。

以上のことから、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。